



じ か つ



自 立 活 動 だ よ り NO. 6

令和3年5月11日（火）文責：佐方



◇ ことばを育てるかわり

2 ことばが育つ話しかけ方

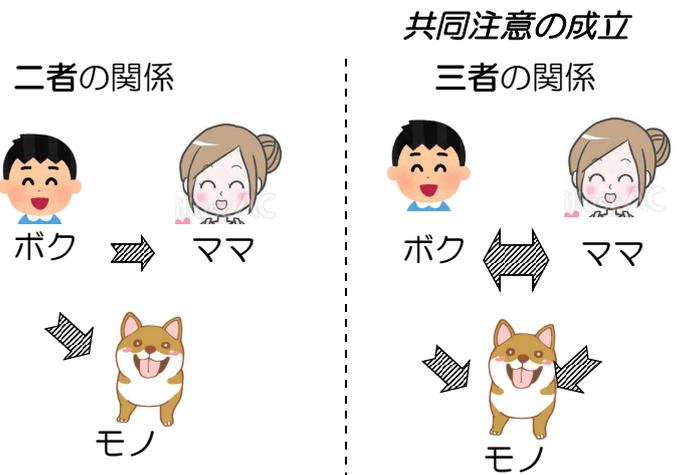
1) 共同注意

二者が一つのものに同時に注目する共同注意（joint attention）の成立は、言語コミュニケーション発達にとって不可欠である。（右図）

一つの「モノ」に二者が同時に注目し、その「モノ」を共有するのが視覚的共同注意である。例えば、子どもが犬を指さし、保護者も同じものを見ているときには視覚的共同注意が成立している。

一方、一つの音声のつらなり（ことば）に二者が同時に注意を向け、そのことばを共有するところに「ことば」が成立する。「リンゴ 食べる？」、「食べる」という会話は聴覚的共同注意に基づいている。まだ話せない子どもは見つけた「モノ」を指さし、「あ！」と声を出して保護者を振りかえる行動が見られる。これは、まだ音声言語になってはいないが、「見て、ワンワンいるよ」と同じ意味であり、ことばの前段階である。

共同注意：複数の人が一つのもの（同じもの）に注意を向けること



2) 子どもの興味に大人が合わせる

この時期、子どもが視線を向けた対象について「〇〇いたね」など、大人がことばをかけることが、最も有効なことばかけの方法である。子どもが視線を向けているモノには、子どもの注意が向いている。注目しているモノについてその名称や属性について（「ワンワンだね」、「白いね」、「毛がフサフサしているね」）話してもらえば、目と耳から同時に刺激が入り、記憶の貯蔵庫にたまりやすい。子どもの興味に大人が合わせることは、年齢が進んでからも有効であり、特に発達障害のお子さんと対応する際は大切である。

つづく

※ 「ことばのビル」「ことばの育ち～『ことばかけ』のためのヒント」も併せて添付します。